

John Mung English Oratorical Contest

What English meant for Manjiro and what English means to me

平成30年8月3日(金)、高知県立坂本龍馬記念館 新館ホールにて第4回ジョン万次郎英語弁論大会が開催されました。沖縄県から1人、千葉県から1人の参加含む中学生10名、高技生10名の計20名の学生達が参加しました。年を追うごとに参加者のレベルが高くなり、審査員の方々も選考に苦慮されていましたが、厳選な審査の結果、中学生の部で小松広美さん(土佐山学舎3年)、高校生の部では大崎日南子さん(伊野商業3年)が特別賞を受賞しました。2人は9月18日からシアトル・ワシントン州で開催された「第28回日米草の根交流サミット2018」に派遣されました。



——— 第28回草の根交流サミットに参加して 高知市立義務教育学校土佐山学舎9年(現在 高知県立追手前高校1年) 小松 広美 ———



私は、昨年9月に行われた、第28回草の根交流サミット2018「シアトル・ワシントン州大会」に参加させて頂きました。7泊8日間という短い期間でしたが、たくさん思い出を作ることができました。船上でのスピーチ発表は、ものすごく緊張してしまい途中で頭が真っ白になりましたが、何とか最後までやり遂げる事ができました。スピーチを終え皆さんから大きな拍手を頂いた時は、胸がいっぱいになりました。また、初めてホームステイも経験しました。ホームステイ先の家族には私と同じ年の女の子がいて、話をする中で大きな刺激を受けました。別れる時、「大人になったらまた会おうね」と約束をしてきたので、さらに英語の力をつけ、必ずもう一度会いたいと思っています。

シアトルでは、イチロー選手が活躍したセーフコ球場やスターバックスコーヒー第一号店、世界で有名なボーイングの工場など色々な所にも連れて行って頂きました。このサミットの中で、現地のボランティアの方や、日本から参加していた多くの方々とも交流する事ができました。現在でも交流は続き、受験の時などには暖かい応援のメッセージを頂き、大変うれしく思っています。

今回のサミットへの参加は、自分の将来について考えるきっかけとなりました。私は将来、国際関係の仕事に就きたいと考えています。

4月から高校に入り、日々の課題や勉強で大変な事がたくさんありますが、色々な事に挑戦して頑張っています。

もっともっと英語を勉強し、ジョン万次郎から学んだジョン万スピリットを様々な所で発揮し、このような機会を与えて下さった皆さんにご恩返しができるように頑張っていきます。

——— アメリカに行って感じたこと 高知県立伊野商業高等学校3年 大崎 日南子 ———



日本から7,743km離れた都市、シアトル。到着直後の印象は、建物が高くそびえ立っていて、高知よりも空が広く感じ、まさにこれから私の世界が広がる予感を感じさせ、とても興奮したことを覚えています。様々な体験の中で一番心に残る体験は、ホームステイです。

私の思いをくみ取ろうと、ただたどしい、問題だらけの英語に一生懸命に耳を傾けてくれるホストファミリーの姿に、胸が熱くなりました。また、英語を全く知らないジョンがまさに英語を体得し、出会った人々と素晴らしい人間関係を築いたことに思いをはせると、ジョン万次郎は本当に強く、努力家であり魅力ある人物だったのだなあと思いました。ホームステイを終えて帰る時、第2の家ができたような温かさを感じました。

ジョンもホィットフィールド船長と出会いアメリカで生活する中で、苦しいことだけではなく、新しい刺激を受け、楽しみながら成長し、寂しい中にも第2の故郷ができたという温かい気持ちも加わって帰国したのではないのでしょうか。お世話になったホストファミリーとは、時々メールで交流しており、この出会いを大事にしてゆきたいと思います。

一つ、日本人として考えさせられた出来事があります。それは、シアトルの空港で迷った時、見知らぬ方に道を尋ねると、優しく当たり前のよう説明してくれたことです。本当に嬉しかったです。日本では海外の方から話かけられると、“I can't speak English.”とだけ言って、その場を立ち去る日本人がいるとよく聞きます。そこに残された海外の方は、無視される辛さと、どうしようもない不安を持つのではないかと、今の自分はその気持ちがよく分かります。だから、下手な英語でも、うまく伝わらなくても、私はその人に寄り添える人でありたいと思います。

私はトロッコ観光列車のガイドをしています。ジョン万次郎が帰国した日、11月16日の2日後のガイドでは、彼が日本の友人たちと経験を共有したように、シアトルの思い出と共にジョン万次郎を紹介し、多くの方々とも共有をしたいと思っています。ジョン万次郎のような open mind を忘れずに成長していきます。

ジョン万次郎の過ごした土地を実際に訪問する機会をいただいたことに、心から感謝いたします。